

点 図 の 世 界

日本ライトハウス点字出版所

宮 田 信 直

はじめに

点字出版所の印刷ページの中に触図が占める割合は決して高いものではない。当出版所が担当している児童図書の制作にしても、絵が主体になっている原本は、たとえ一般には高い評価を得ていても、選定の段階で除外されている。また、本文中に図版と同趣旨の説明文がある場合も、触図化する必要がないとして省略されることが多い。

その理由としては、まず、原本のレイアウト、図や絵の構図、色彩・トーンなどのイメージを正確に伝える手段が現状では不十分な上に、図や絵を理解するための適切な指導が制作側では充分にできること、指先で図や絵を触察するのは容易ではないので、図や絵はなるべく少なくして読み手の負担を軽くしたいこと、などが挙げられる。

かつては教科書でさえ、触図が必要な教材は、削除あるいは差替え扱いをされがちであった。昨今、ようやく盲学校等での触図の指導が定着して、当所でも、説明図や挿絵など必要な場合には、いくつかの印刷技術を使い分けて図版を作成している。ただ恥ずかしい話であるが、触図制作には相当な人手と時間が必要であり、その面でブレーキが掛けがちなこともお断りしておきたい。

一方、触図制作については指導書・参考書というものが少ない。まとめたものとしては、後藤良一らによる『点訳のための触図入門』（日本図書館点字部編、昭和61年）、同『視覚障害者のための公共交通機関利用ガイドブック作成マニュアル』（公共交通機関利用ガイドブック作成マニュアル策定調査委員会編、昭和59年）、木塚泰弘らによる『歩行用触地図製作ハンドブック』（日盲社協編、昭和59年）ぐらいであろうか。『入門』は、地図やグラフへの具体的な取組み方と豊富な実例を掲げ、点訳ボランティアや点字出版職員などの日常作業に役立つ実用的な図書である。『マニュアル』も駅構内や周辺図の実例が各種印刷技術による实物見本で示されている。『ハンドブック』は、触地図

の編集・印刷をテーマにしつつも、視覚障害者の読図能力の考察に詳しく、また坂本洋一による懇切な参考文献の紹介がある。

ところで、触図といつても、点字用紙に凸点（あるいは凹点）を打出したエンボス点図をはじめ、固体点図、サーモフォーム成型図、発泡印刷図から、立体コピーや手作りによるものまで多様であるが、その基本形は何といってもエンボス点図であり、さらに点図は点字文と同じ舞台を使うから、印刷以前の編集・作図段階で点字文との詰合わせなどを工夫できる利点がある。

この機会に、いささか理論的な裏付けを欠いてはいるが、これまでに手がけたいくつかの点図作品とその制作過程を紹介して、上記の指導書に蛇足を加えてみたい。

1. 点字の基本

点図は、点字を触読できる人であれば無理なく読み取れるような、適當な大きさなり高さなりを持つ点を紙に打出して制作された图形である。この場合でも、墨字の形どおりに線图形を浮出させることも可能であるが、触読においては、小さい三角形△は点が三つの⋮というように頂点だけを読み取られることが多く注意が必要である。

さて、木塚の「点字科学散歩」（昭和56～57年）によれば、仲村点字器の点字のサイズは、点間は①④間が2.1ミリ、①②間・②③間が2.3ミリ、マス間の④①間は3.0ミリ（いずれも中心間）であり、発泡印刷での最適値は①②間・①④間が2.2ミリ、④①間が3.1ミリであった、とある。ちなみに、点そのものの標準サイズは、底径が1.5ミリ、高さ0.4ミリぐらいとされている。

底径1.5ミリの点と2.1～2.3ミリの点間で縦3点2列の点字が読み取られ、3.0～3.1ミリでマスの区切りがついているとするならば、点図においては、中心間が2ミリもしくはそれ以下の点列であれば連続した実線として読み取ってもらえるということになる。また、点図の点線は、2マスの①①間である5.3ミリ程度が基準になるものと思われる。余談であるが、文の終りの②⑤の点による区切り線なども、線とはいっているが多分、せせこましい破線として読み取られているのであろう。

点図の点そのものは、凸型のピンとその受けさえ用意すれば大小さまざまに製版できるが、触察による識別実験では、大点・中点・小点の比率を1.5倍以上、例えば3:2:1程度に設定するとほぼ確実である。また図中での大小の使いわけは、実用上は3種類ぐらいに止めた方が、触読者の負担が軽くて済む。ただ作図や製版の都合も考慮して多種類を用意し、上記の条件の範囲で使いわけるのが望ましい。

ところで、墨字と点字との相違点のひとつに、墨字は同時的に認識されるのに対し点字は継時的に認識されるという事象があるが、このことは触図においては一層顕著で、視読では全体を見てから細部に及ぶのに対し、触読では、指頭が触れた部分の認識が指先の移動によって蓄積され、一定量に達して始めて全容が判明するという経過をたどる。

点図など触図の制作に当っては、この事情を踏まえて、本文との関わりが少ない場合には図の主題を点字で提示したり、触察に適した手掛けを図中に置くなど、充分に配慮することが望ましい。

2. 作図の実例

(以下の作例は特別に転写したもので、実際の点図と同一ではない。)

a. 『宇宙飛行案内』クルシャンツェフ / 金光不二夫 / 理論社 (点字版 : 全2巻)

宇宙ロケットについてのわかりやすい解説書で、類書と同様、写真や挿絵が多い。写真是、その説明文を適当な箇所に挿入して代用した。

ロケットの原理・構造の説明図などは、ほぼ原本に準じて作図した(図a-1)。また、大砲を使って速度と軌道の関係を説明している部分では、点図用として、縮小に耐えられる特製の大砲を書いた(図a-2~4)。

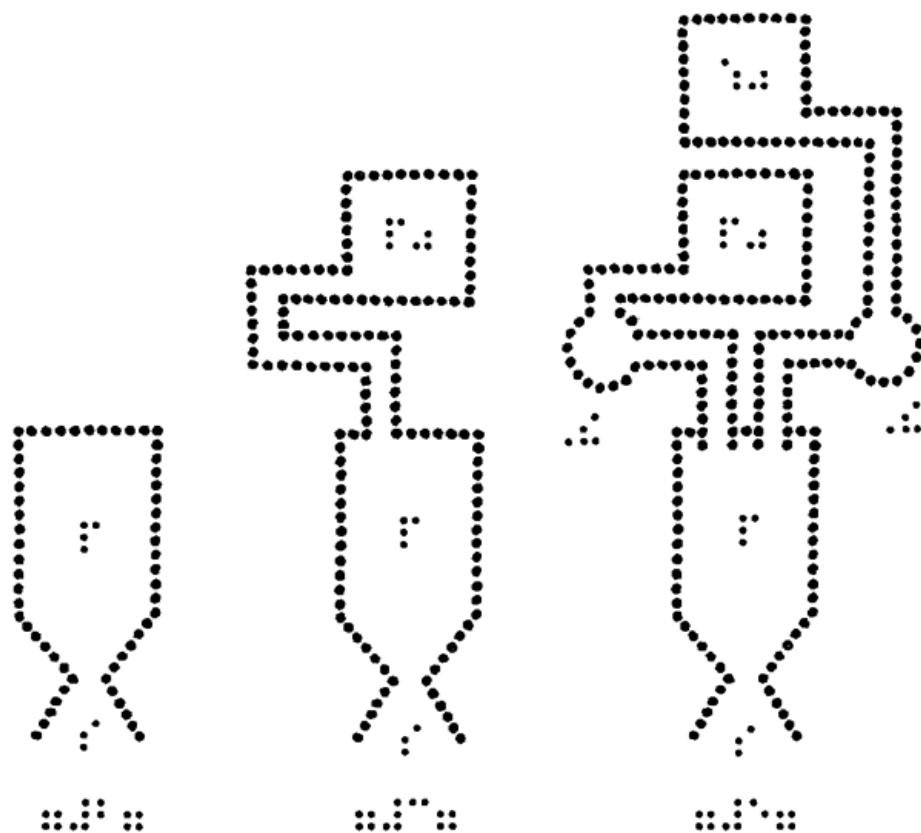
一般に模式図などを作図する場合は、あらかじめ全体を読んだ上で構想を練らないと行き詰ることがある。時として、最終図から書き始めて最初の図に戻る方が楽なケースもある。

軌道の修正と着陸船の制御については、点図は原意を損わない程度に簡略化したが、着陸船の方はそれ自体が複雑な形をしている(向きは45°回転させた)

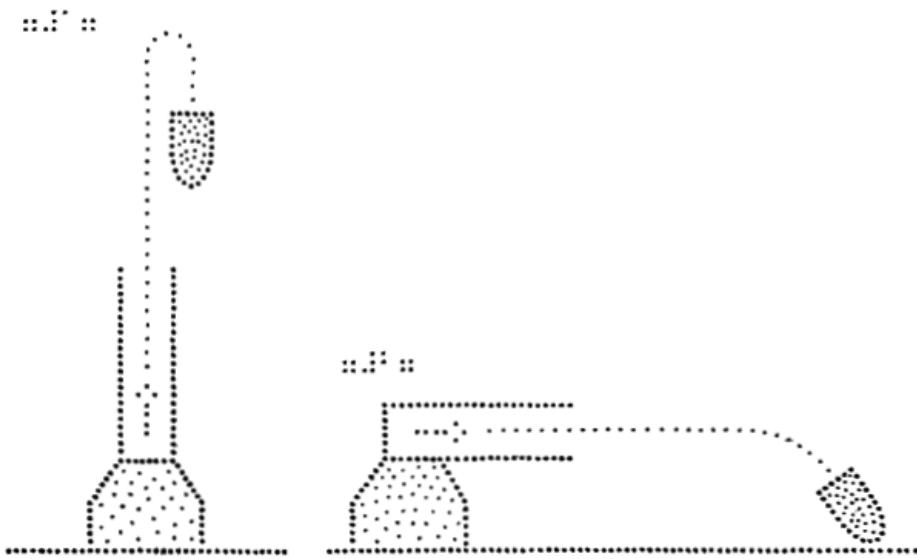
ことと、1ページ内に収めようと8段階の図を3段階に落したため、校正段階でも採択が難航した（図a-5,6）。

このように図形を簡略化するのは、情報量を限定することによって触読の条件を整えているのであって、特に必要のない箇所や飾りの部分は割愛せざるを得ない。例えば『重さに目をつけよう』（板倉聖宣／岩波書店）には図a-7に示した図があるが、原本挿絵の古典ムードは見事に消え失せてしまっている。

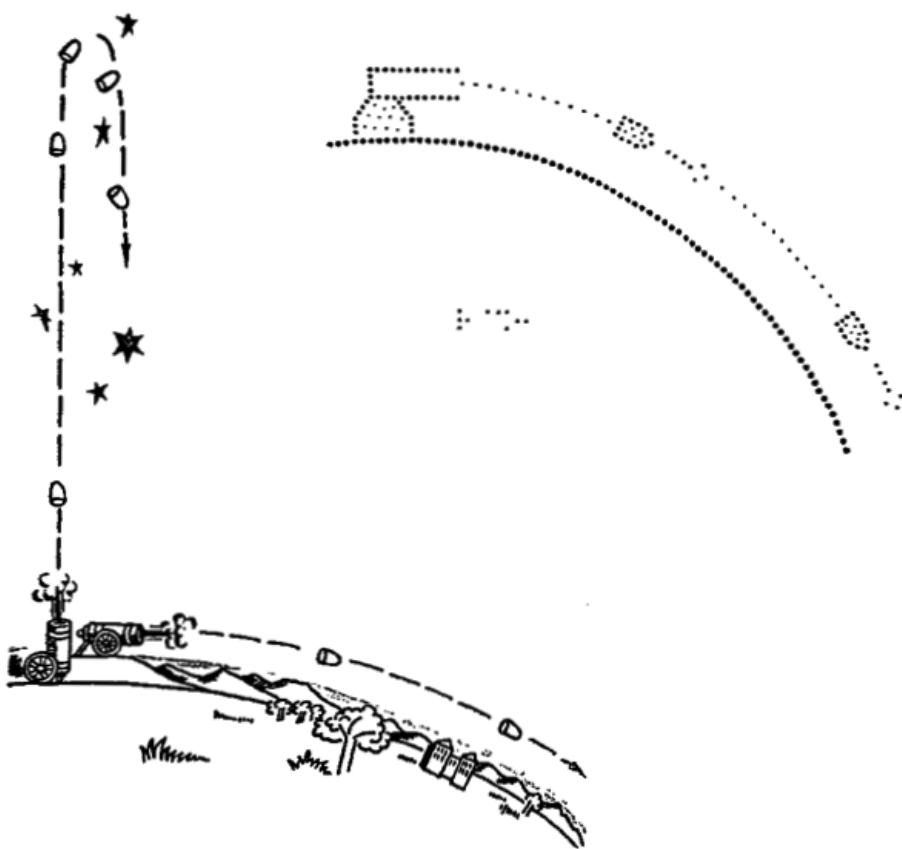
『宇宙』のドーナツ衛星も、挿絵の幻想的な雰囲気は出しようがなく、構造だけでも伝えようと、極端にデフォルメした模式図を作図したが、線画による人物は分かりにくいというので、急拠“注”をつけ加えた（図a-8）。



図a-1



図a-2



図a-3

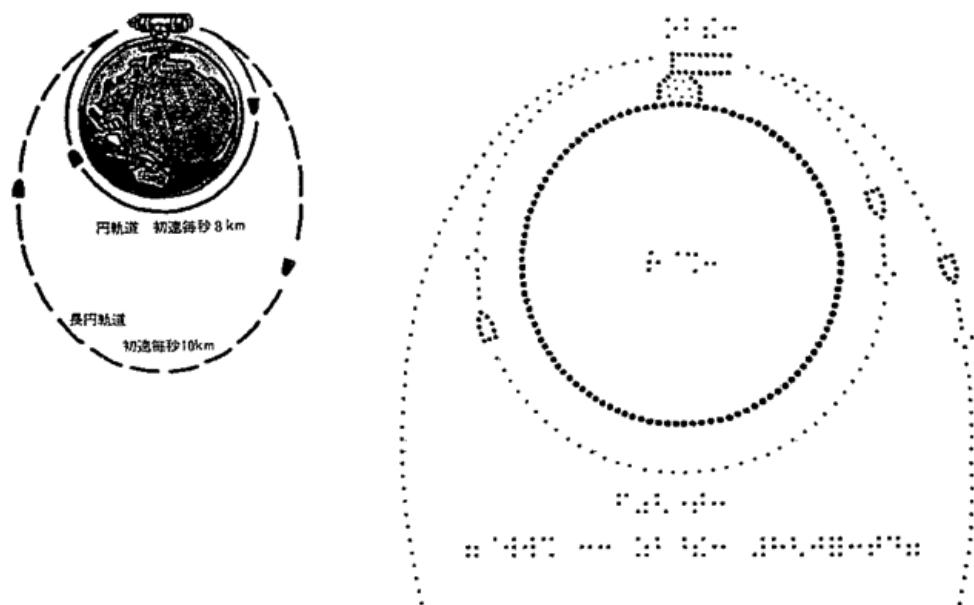


図 a - 4

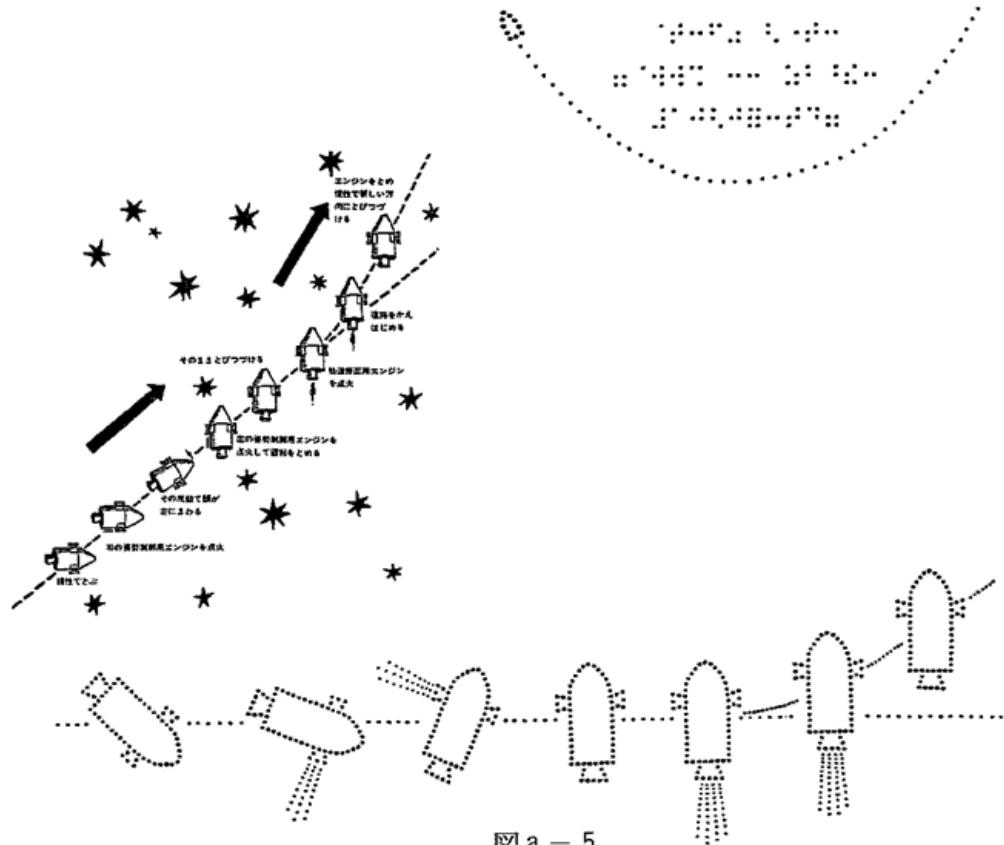


図 a - 5

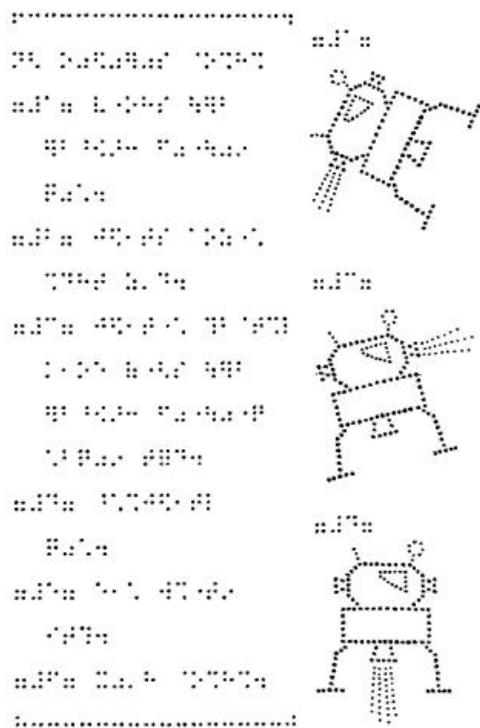
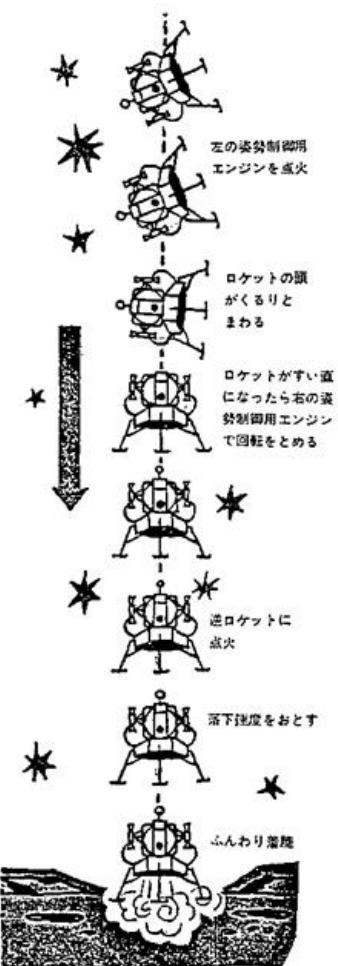
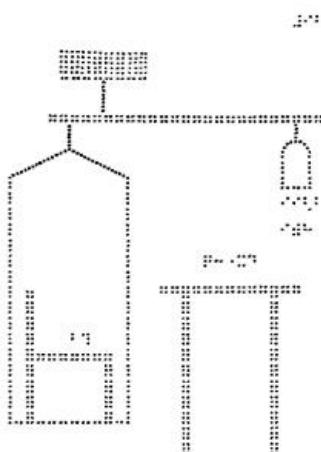


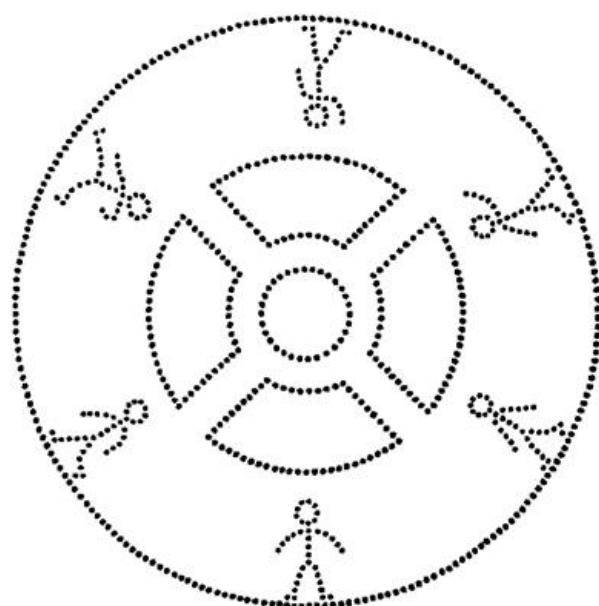
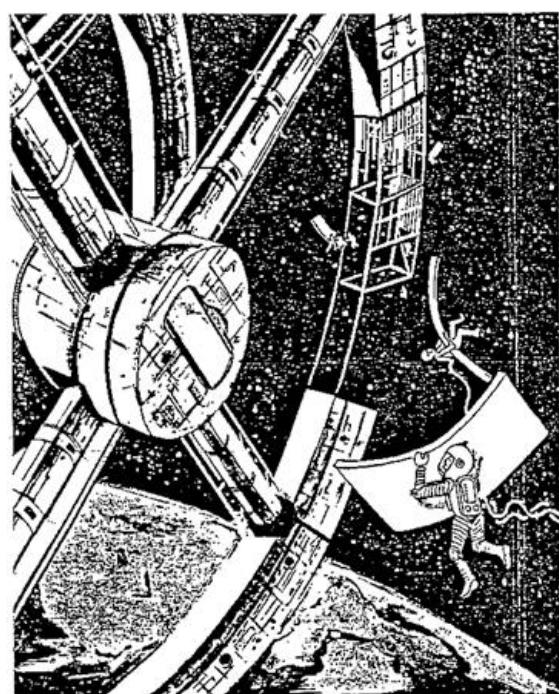
図 a-6



サントリオ著「医学的なつりあいの理論」より

図 a-7





図a-8

b. 『きかんしゃやえもん』阿川弘之／岩波書店（点字版：本文21頁）

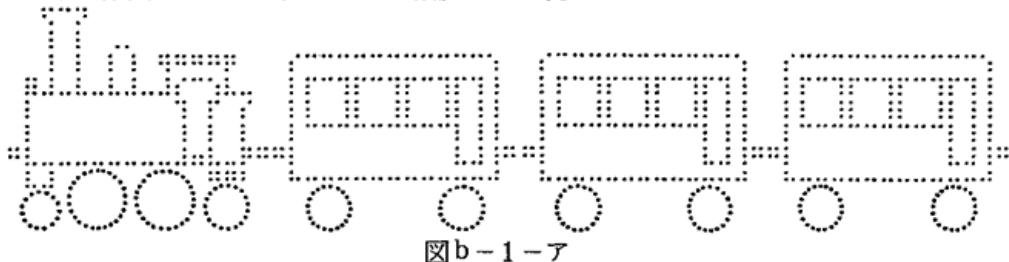
漫画風の挿絵（岡部冬彦）なので、すこぶる作図しにくい作品。情景は切りすべて思いきり単純な図柄にし、子どもたちも自作して楽しんでいる点字板作図を利用した。自動製版なので一度下図を作ると再利用ができるが、しっかりした構図が頭にないと入力段階で時間をくう。車輪や煙は作図機で加点した（図b-1,2）。

この煙をはじめ雲や炎は、触られるものではないので図にしにくい。止むを得ず墨字での定形で処理しているが、この辺の約束事の指導も重要である。編集段階では、真直ぐ彼方に伸びる線路を書けという注文もあったが、遠近法に恐れをなして取下げて貰った。

やえもん号は、場面によって大小2種、それぞれ左右の向きを変えて使っている。拡大・縮小による図柄の違いなども理解してもらえばと願っているのだが、これと同じ方式は『どろんこぶた』（ローベル／岸田衿子／文化出版局）にもあって、こちらは百パーセント自動製版である。このときは「はじめに」でも述べた触図指導の一方策として、指導用“墨字版”も作ったのでお目にかけよう（図b-3）。

図b-3の右図は、どろんこを示すために地面の線が書いてある。実は他の絵にも最初は全て地面やレールの線があったのだが、触読の邪魔になるというので、消してしまったのである。

さて、やえもんは頑張りすぎて、火の粉で火事を起してしまうが、慌てふためくお百姓さんは図b-4の線画にした。これも図a-8同様評判はよくないが、人物を原図に合せて作図するのは、手法が不完全な場合はイメージが壊れる危険があって、『おかあさんだいすき』（ブラック／光吉夏弥／岩波書店）でも、主人公は線画にして逃げている（図b-5）。



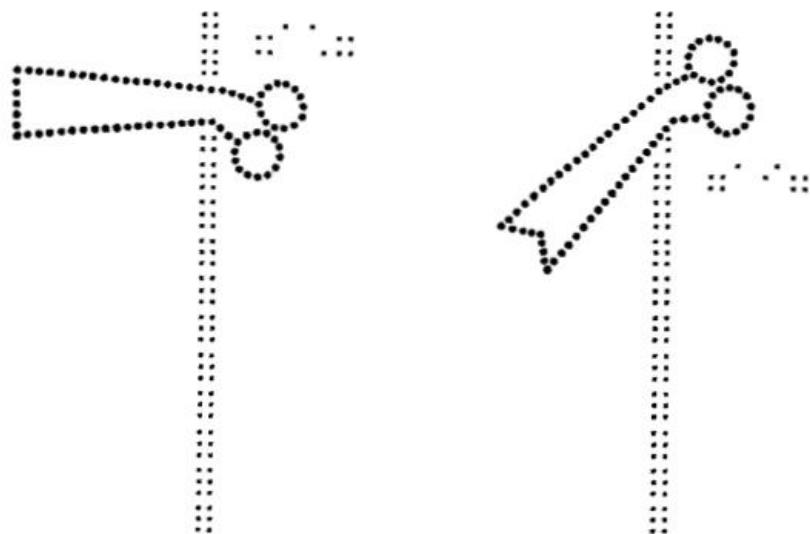
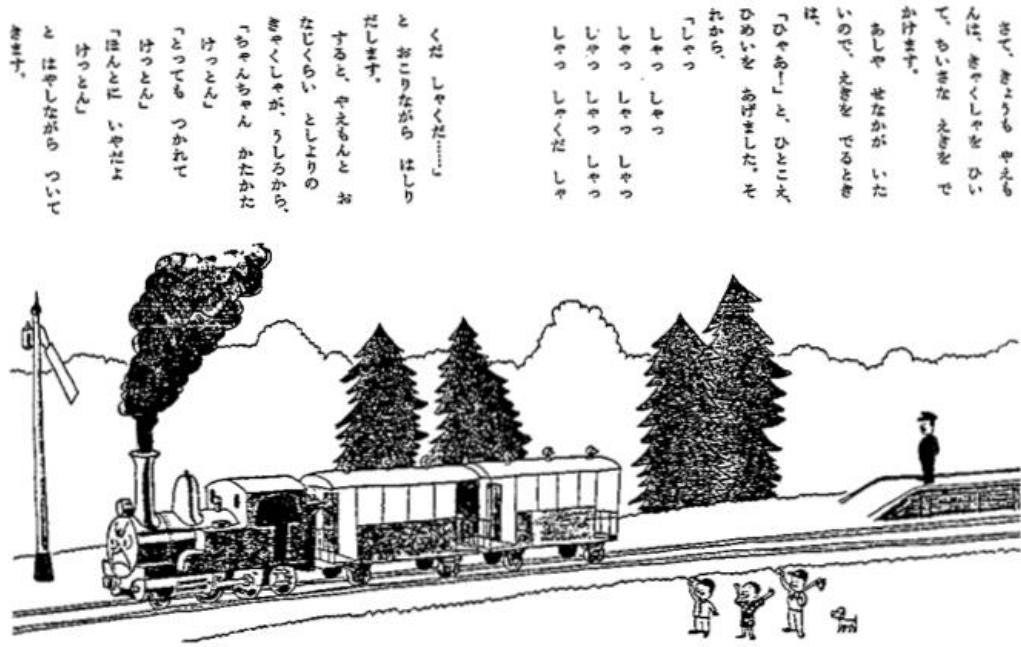


図 b-1-1

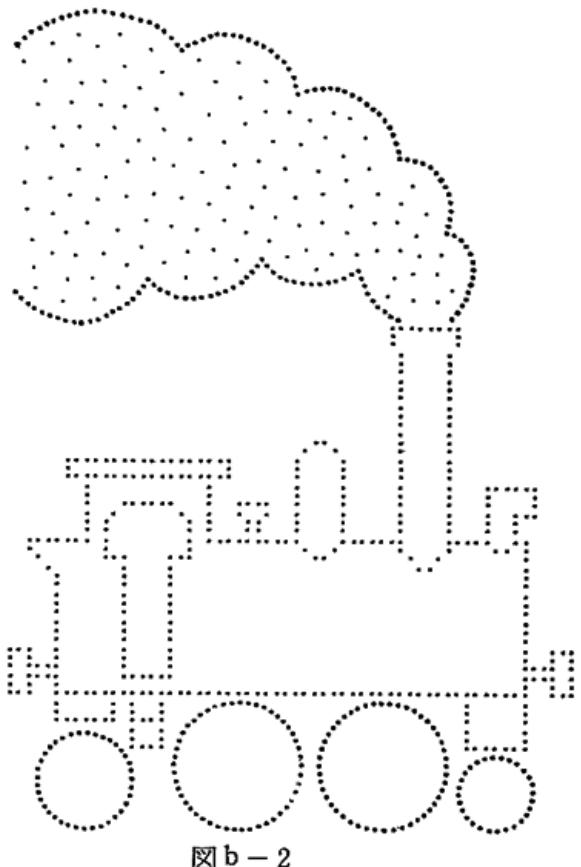
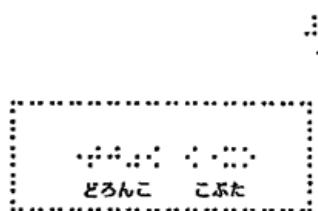


図 b-2

 1	くわく。 こぶたわ おひゃくしょーさんの うちの ぶたごやに すんで いました。	 2
--	---	--

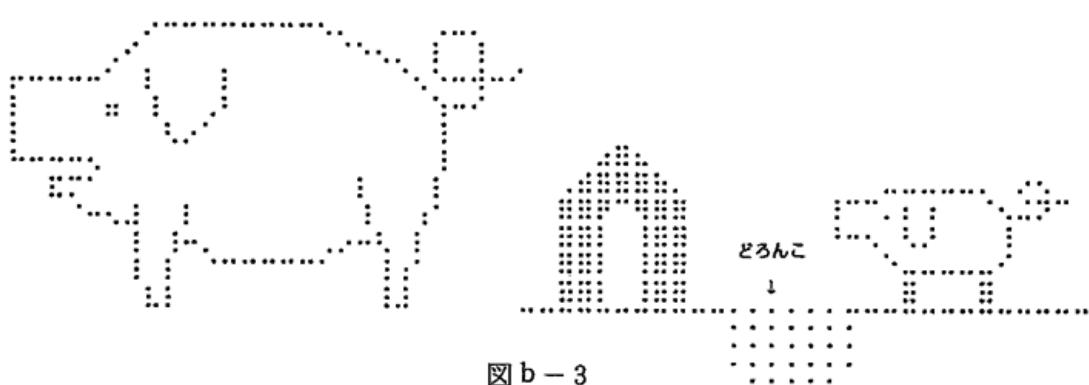


図 b-3

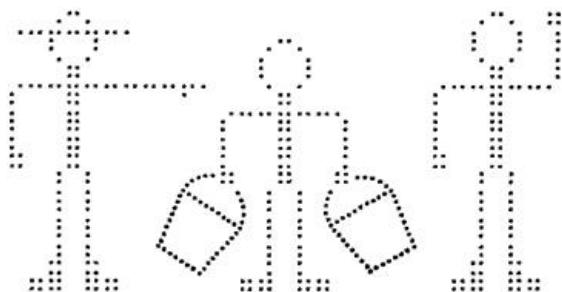


図 b - 4

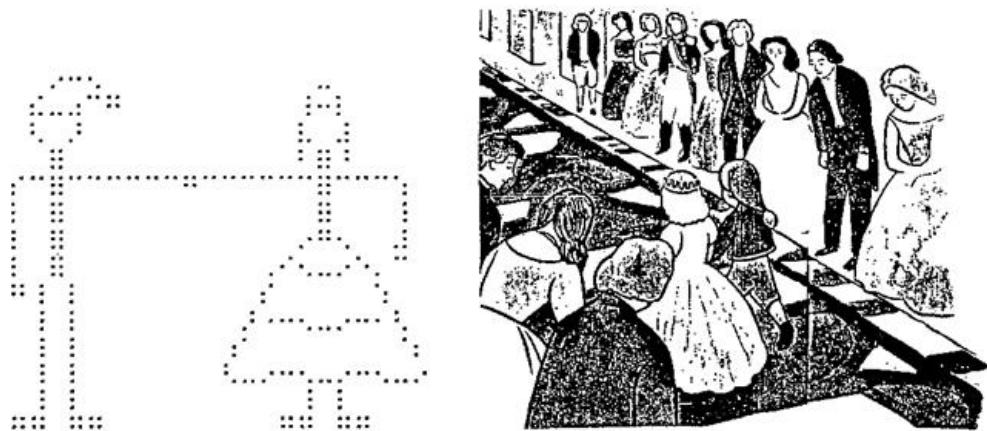


図 b - 5

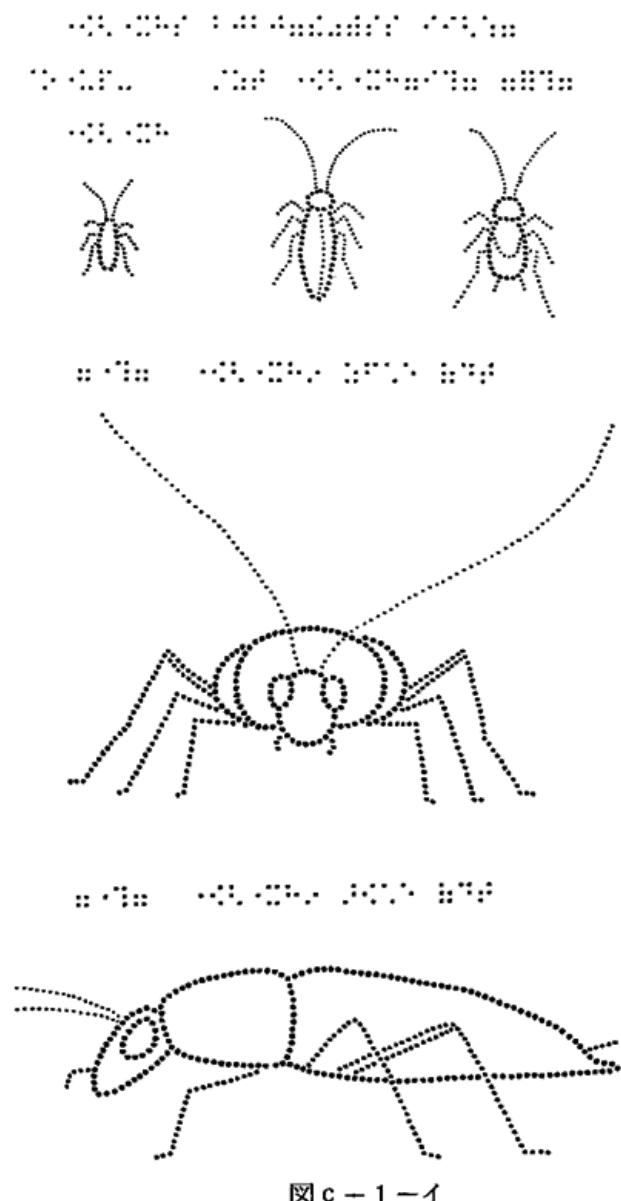
c. 『ゴキブリ 400000000年』松岡洋子／北隆館（点字版：本文27ページ）

ユーモラスな文と絵で、ゴキブリの恐竜時代からの生態が紹介されている。点図では、死刑を宣告されたゴキブリの表情や、恐竜の不気味さは伝えようがないが、後者は何か図を入れないと文章が繋がらない（原文の書き改めはなるべく避けている）ので、アロサウルスや首長竜などを作図した。こうなると主人公の絵がないのでは格好がつかない。仕方なく、いずれも原本にはないが、原寸大で日本在住のゴキブリ図を書き、次に大きく拡大した三面図を作図した（図c-1）。

ところで、点図ではよく拡大して提示されることが多いが、その際にスケールが判断できるようになっていないと思わぬ誤解を招く。この本で初めに原寸のゴキブリを提示したのはそのためである。



図c-1-ア



図c-1-イ

d. 『ことばあそひうた・同また』谷川俊太郎／福音館書店（点字版：本文60頁）

全編ひらがな書きの“ことばあそび”が、味のある文字と絵（瀬川康男）でまとめられた本。正統を合わせて点訳しても、詩だけではページ数が足りず本にならないし、原本の雰囲気を何とか伝えたいと、飾り枠に工夫を凝らした。先例を知らないので、点字ワープロを34行ベタ打ちにセットして十数種の枠を作成し、詩にふさわしいものを選びました。が、時には「ばか」のように、詩が枠を決めてしまうこともあった（図d-1,2）。

次に両面製版のための表裏の合わせを、墨点字プリントとトレース台を使って設計した。ところが、出来上がった刷見本は、文字や枠の集中する中央部が盛りあがってしまい製本ができない。そこで今度は飾り模様を何種類も作り、周辺部に散らして厚みのバランスをとった（図d-3）

このような“ことばあそび・文字あそび”は、点訳に苦労することが多い。「ことこ」や「ばか」などでは見開きで2種類の点訳を並べ、面白さを演出している。また『こびとのプームックル』シリーズ（カウト／松尾幸子／評論社）では、プームックルが活字の組版に悪戯をする場面があり、とにかく（図d-4）のように仕立てたが、問題の箇所が原本での墨字のレイアウトにかかる部分だったので、読み手にとって分りにくく、未だに心残りとなっている。

《インフォメーション4 日本ライトハウス職業生活訓練センター出版物》

視覚障害研究バックナンバー

10, 12, 13, 19, 22, 24, 25, 26（目次は48ページ）の各号の在庫があります。

歩行訓練 第2版（芝田裕一著） 4,000円（送料350円）

電子機器を活用した歩行訓練（面高雅紀著） 6,000円

歩行訓練研究第1号 800円（送料240円）

歩行訓練研究第3号（昭和63年8月発行予定） 800円（送料240円）

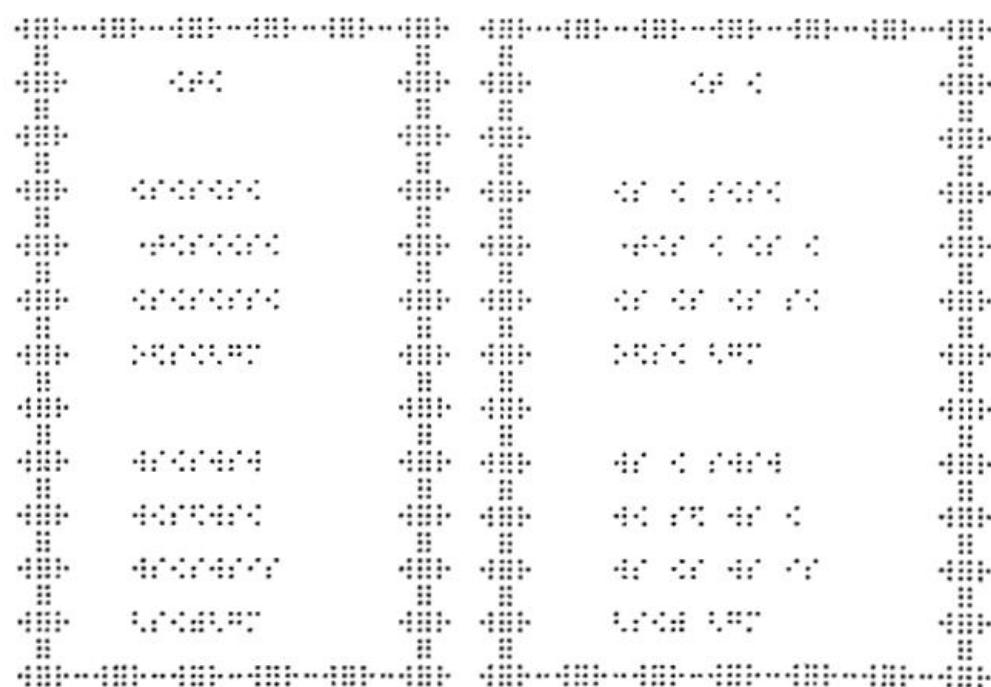
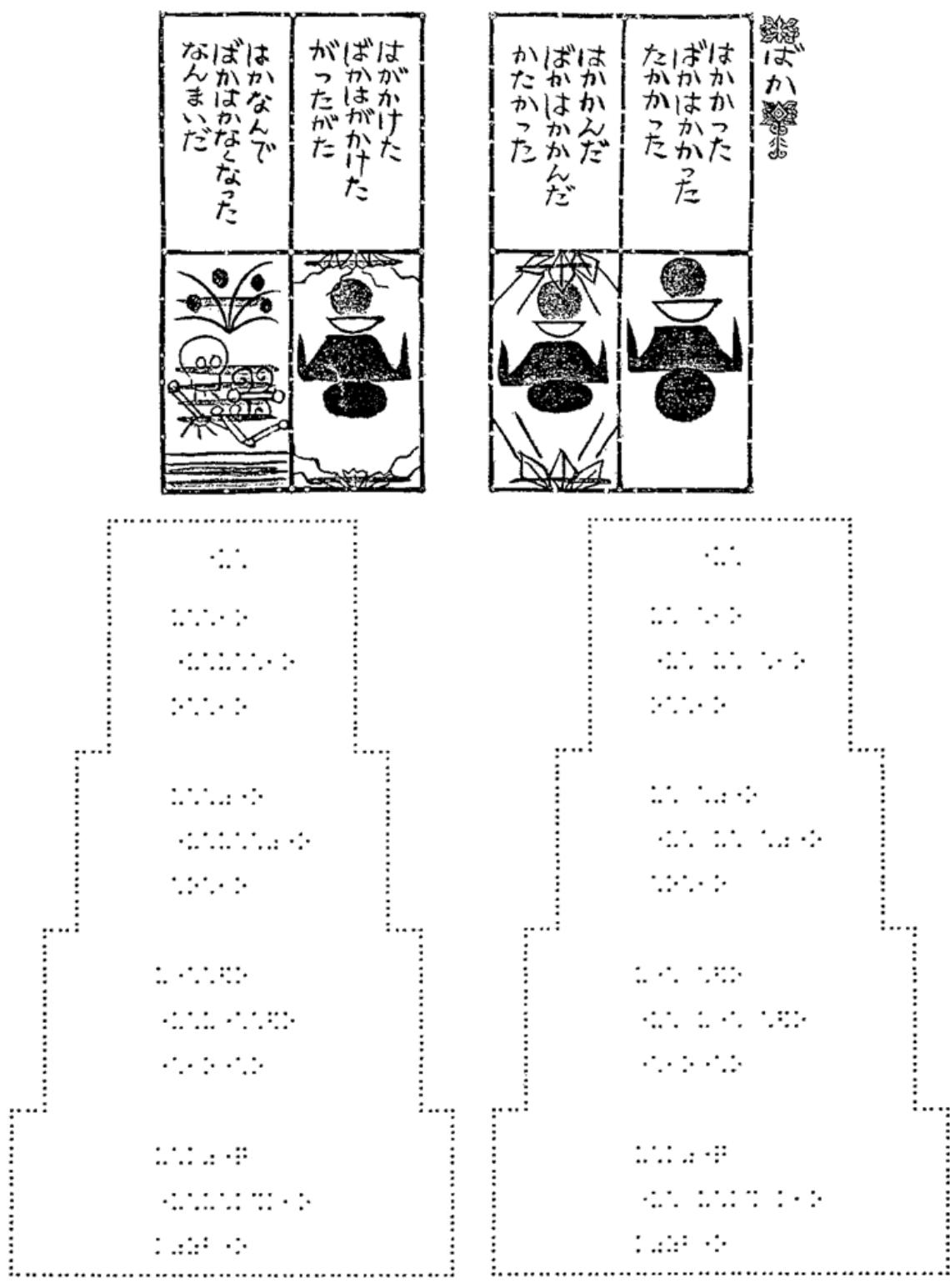
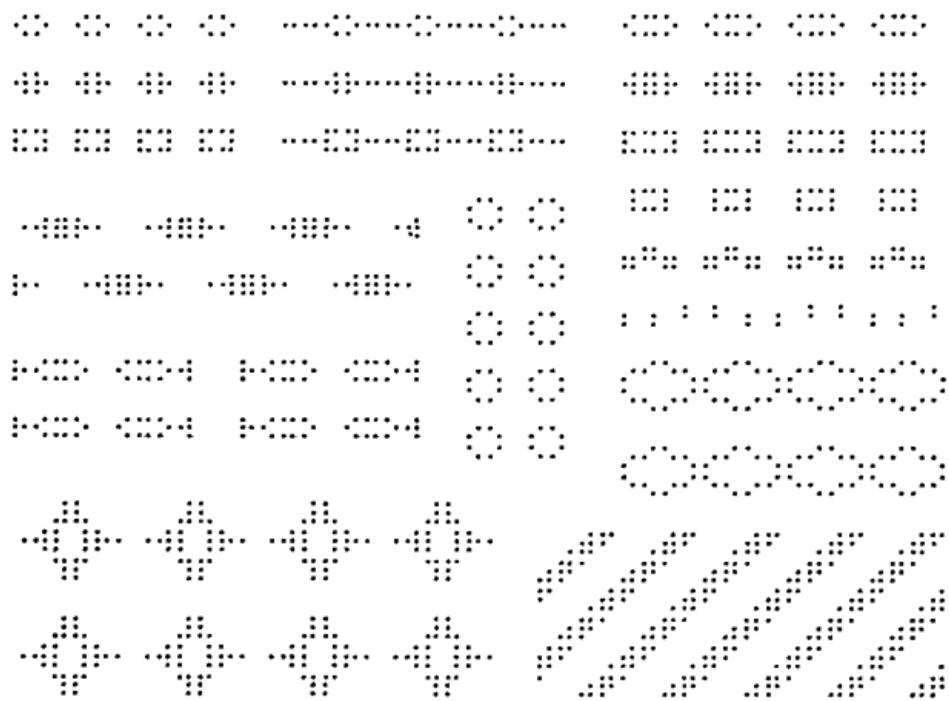


图 d - 1



図d-2



☒ d - 3

抜けているところに正しくあてはめてゆけばよいでしょう。でも、そんなことをするのは、この、すてきな帆かけ船と、この、すてきな木のためにさんねんことだと思うなあ。

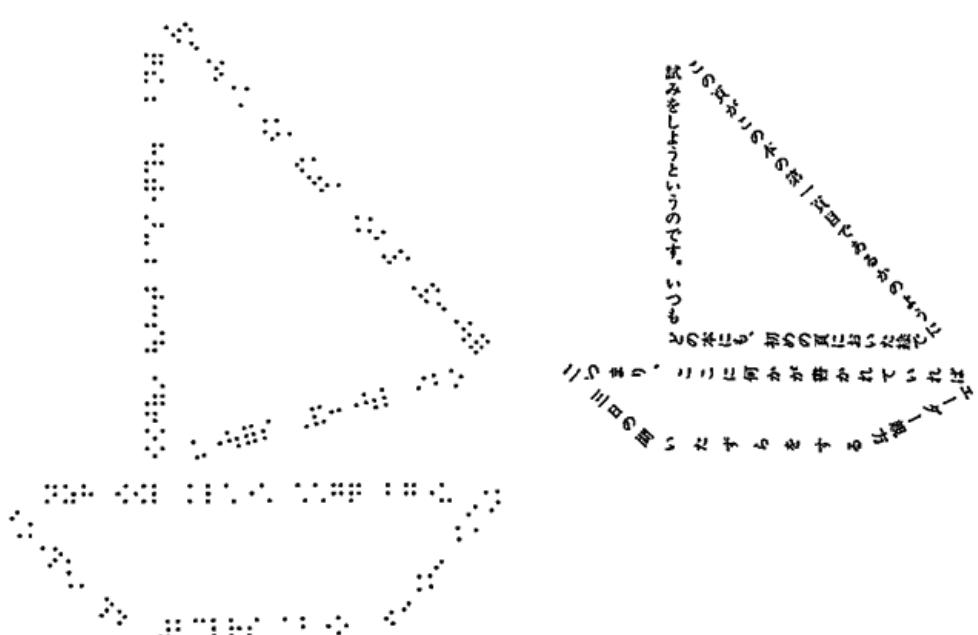


図 d - 4

e. 『ぞうのババール』ブリュノフ／矢川澄子／評論社（点字版：シリーズ、本文各25～30ページを合本）

子象のババールが象の国の王様に選ばれ、結婚して子供が生まれて…、と続くお話。素晴らしい絵を割愛するのは止むを得ないが、それでも各編それぞれ中扉と中間部に点図を入れることにした。

「おうさまババール」の中扉では、首都セレストビルの地図（図e-1）を書き、「しんこんりょこう」の戦いの場面では新兵器の絵（図e-2）を載せたが、いずれも、との文章だけでは説明のつかない部分であり、効果的な挿絵になったのではないかと思っている。

なお、この本に限らないが、絵本では、場面の転換がページをめくるときに行なわれることが多い。子どもにとって意外性があり、楽しいレイアウトになっているのだが、点訳の結果が同じページ割りになることはあり得ない。点図を入れたために改ページがうまくいかないなどということがないよう、点図以前の問題としてよく注意する必要がある。

《インフォメーション5 日本ライトハウス点字出版所発行の〔絵のある点字の本〕》

- | | |
|--|-----------------------|
| ■「点図の世界」紹介分 | ★『宇宙飛行案内』(2巻) 2,200円 |
| ★『重さに目をつけよう』(1巻) 1,000円 | ★『きかんしゃやえもん』(1巻) 900円 |
| ★『どろんここぶた』(1巻) 1,000円 | ★『おかあさんだいすき』(1巻) 900円 |
| ★『ゴキブリ 400000000年』(1巻) 900円 | ★『カレーライスの本』(1巻) 900円 |
| ★『ことばあそびうた・同 また』(1巻) 900円 | |
| ★『プームックル、魔女を追いかける』(2巻) 2,200円 | |
| ★『ぞうのババール・ババールのしんこんりょこう』(1巻) 1,050円、
『おおさまババール・ババールのこどもたち』(1巻) 1,150円、
『ババールとサンタクロース、ババールといたずらアルチュール』(1巻) 1,050円 | |
| ★『はははのはなし』(1巻) 900円 | |
| ■その他 | |
| ★『地震をさぐる』(島村英紀/国土社) (2巻) 2,900円 | |
| ★『人類の長い旅』(マーシャル/藤田千枝/さ・え・ら) (2巻) 2,400円 | |
| ★『零の発見—数学の生いたち—』(吉田洋一/岩波) (2巻) 2,700円 | |
| ★『ひろがるさばく』(赤木昭夫/岩波) (1巻) 900円 | |
| ★『UFOと宇宙人の科学』(前川光/大日本図書) (2巻) 2,100円 | |
| 《お求めは、日本ライトハウス点字出版所図書販売部まで(電話 06-961-5521)》 | |

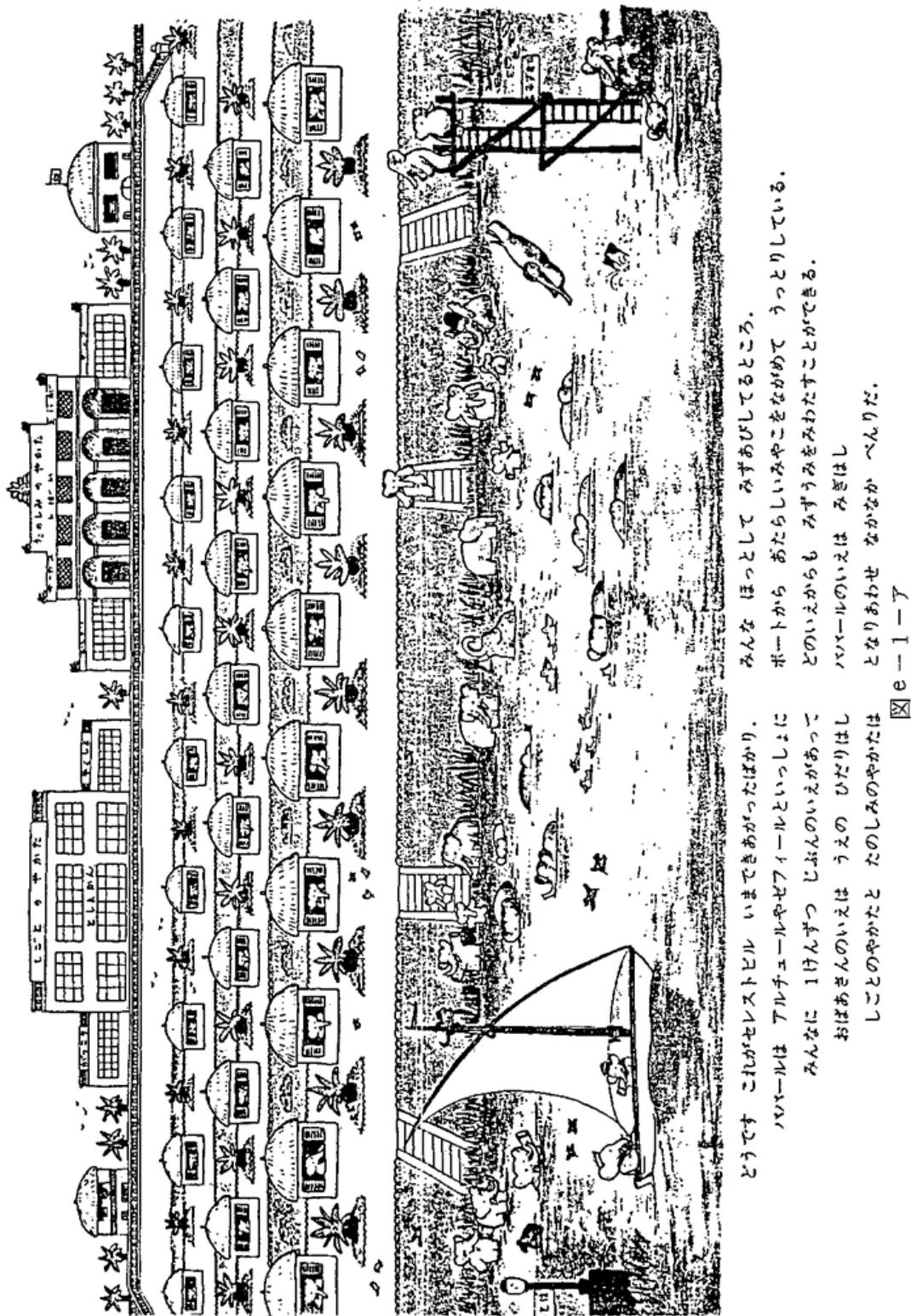
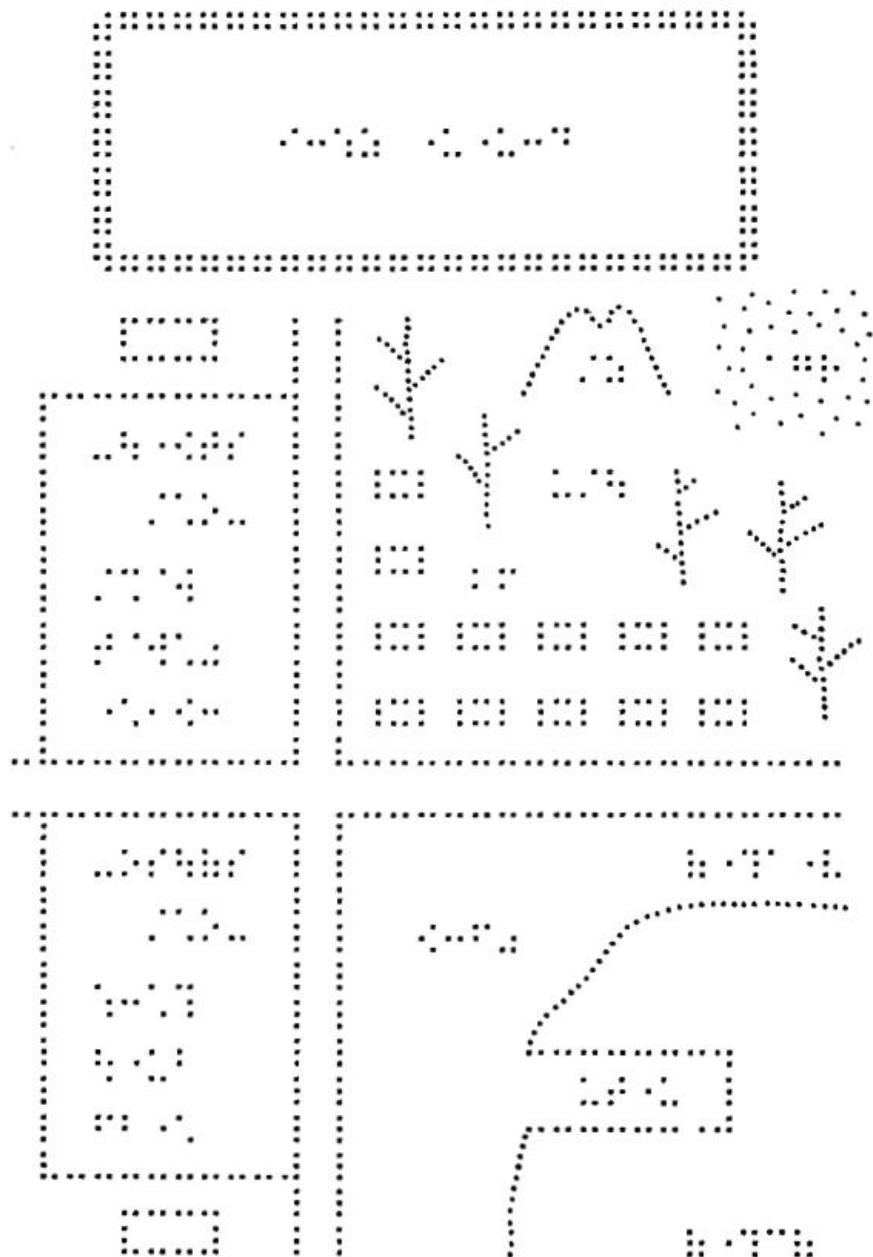
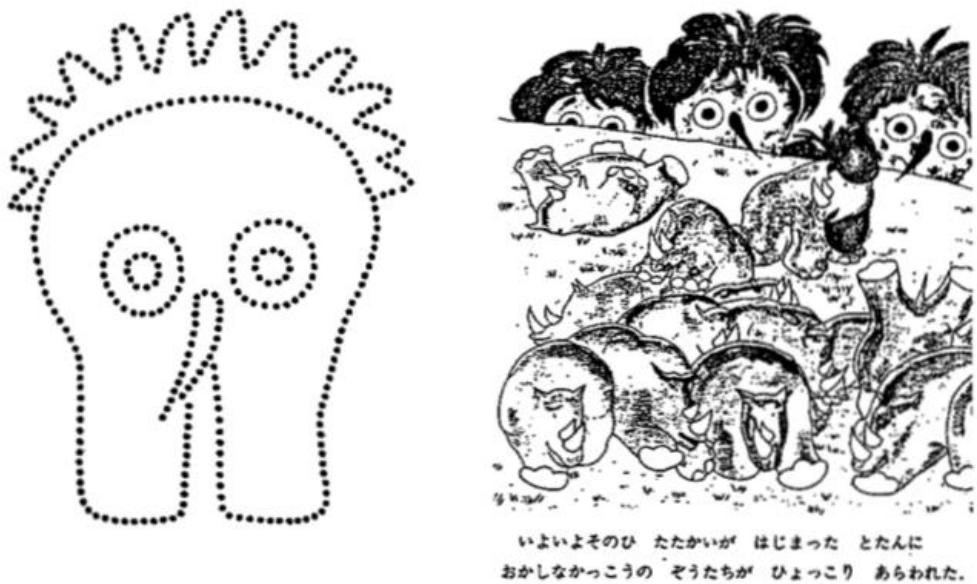


図 e-1-a

どうです これがセレストビル 今まであがったばかり。
みんな ほっとして みずあびしてることろ。
ハバールは アルチュールやゼフィールといっしょに
みんなに 1けんずつ じぶんのいえがあって
どのいえからも みずみをみわたすことができる。
おばあさんのいえは うえの ひだりはし
しごとのやかたと たのしみのやかたは
となりあわせ なかなか へんりだ。



図e-1-i



図e-2

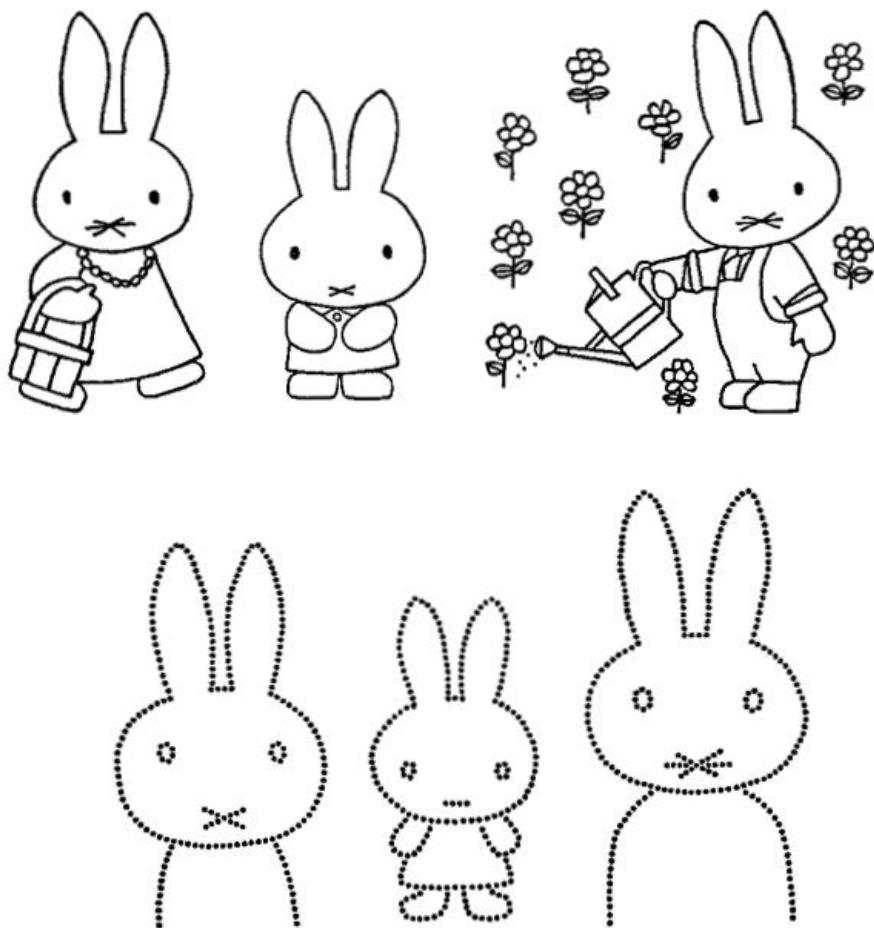
f. 「ちいさなうさこちゃん」ブルーナ／石井桃子／福音館書店（点字版
：シリーズ、本文各12ページを合本）

誰もが一度は見ている名作絵本。この本から絵を抜いたら、絵から色を抜いたら、絵の形を変えたら、果して価値が残るのかと、多くの疑問とためらいがあった。原本の見開きを点字の1ページ片面に収める、となれば、点訳の都合で絵を入れたり抜いたりはしたくない。盲児が生活体験から理解できるように、かつ、原本の味わいは残すように、やれるところまでやってみよう、ということになった。

まず、登場人物をどうすれば区別できるか。原本のフワフワさんとフワ奥さんは、ほとんど同じ顔だが服装で判断できる。が、触察でそれが無理なことは、試作したサーモフォーム版でおよそ見当がついている。そこでウサコちゃんの口をフワ奥さんに譲り、ウサコちゃんは小さな口元にした（図f-1）。

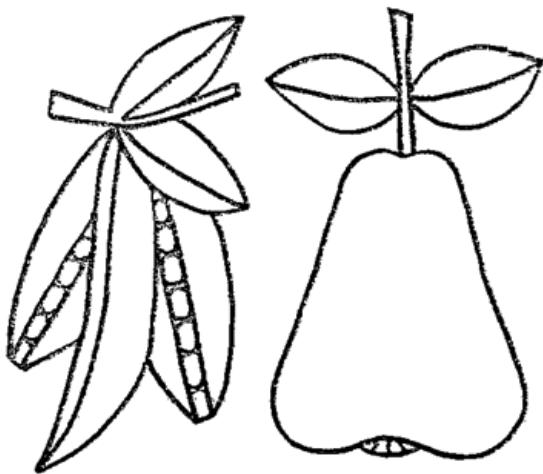
また、つむっている目と眠っている目を違えたり、図柄が複雑なときは、その場面でシンボルとなっている物だけを点図に取上げたりもした。それでも、ジョウロが変な形で分りにくいとか、買物かごや煙突は今では使われていないとかの意見が出た。

図f-2では、洋梨を国産品に変え、さやえんどうも枝葉をとって豆粒を添えた。実は、この図もたまたま梨だったから肌ざわりを考えて細かい点を散らしたが、これがリンゴだとそうはできず、图形と素地の区別に困った筈である。単純な点図は、ある程度大きくなると輪郭線の他に、面記号による図と地の区別が必要なことがあり、注意しなければならない。



図f-1

ふわおくさんの かいものは
 さやえんどうに おいしいなし。
 エンドウは おくさんが たべるため
 なしは ふわふわさんに あげるため。



27

ふわおくさん おはよう。

さやえんどう おいしい。

エンドウ おとうさん おとうさん。

なし おとうさん おとうさん。

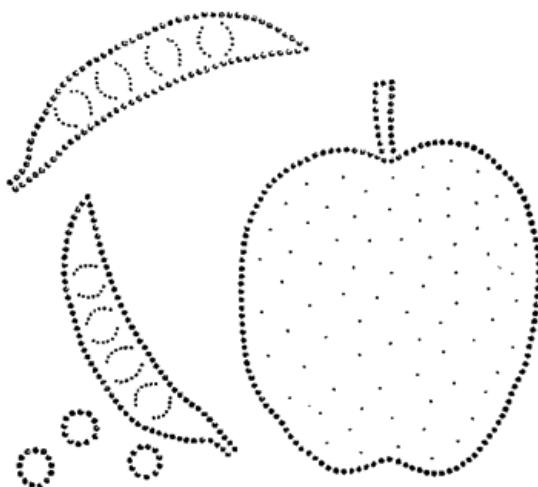


図 f - 2

g. 『はははのはなし』加古里子／福音館（点字版：本文 23 ページ）

虫歯予防の本。説明図は目的がはっきりしているので扱いやすいが、この本の導入部のように、情景を表す挿絵は点訳のしようがないことが多い。とにかく、点字版 1 ページと 2 ページの下に略画を入れてみた（図 g - 1）。

虫歯が進行する場面は、原本の絵にこだわらず、専門書の図版を参考にして書き起こし、左右見開きの挿絵（図 g - 2）にした。原図では引出し線で“さとう”などとしているが、触図では線が交差するのはできるだけ避けたいので、説明文を作って添えている。

なお、特に低学年向けの図書では作図記号の設定などができないから、この図の場合も図外の説明文に変えたが、一般的にも、図の中には言葉は入れず、意味のある空間はできるだけ確保する方がよい。また、この本の絵は触図向きではなかったので書きなおしたが、決して好ましいことではない。『カレーライスの本』（藤田千枝／岩波書店）はその点、原図が分りやすく、そのまま点図に利用できた稀な例である（図 g - 3）。

そのほか『ははは』には、歯に関する食品が絵で示されていて、作図よりも言葉に変えた方がよいのだが、それぞれをどう呼べばよいのか、特定の商品名は使えないで苦労した。なお、裏表紙の歯列の図は本文中に移した。

《インフォメーション 6 書籍》

心がみえてくる — 普通校における視覚障害教師の実践記録 — 1987年12月刊

A 6 版 110 ページ 1 部：1,000 円 全国視覚障害教師の会刊

〒663 西宮市津門綾羽町 1-24 三宅 勝方

見えない目で見る — たった一人の全盲市議山内つねゆき奮せん記(山内常行著)

B 6 版 180 ページ 1 部：1,000 円 地水社 1987年12月刊

〒569 高槻市辻子 2-17-2 山内つねゆきを励ます会 Tel 0726-73-8724

鳥居篤治郎 — 世界に眼を・永遠の青年(赤阪一著：盲先覚者伝記シリーズ 5)

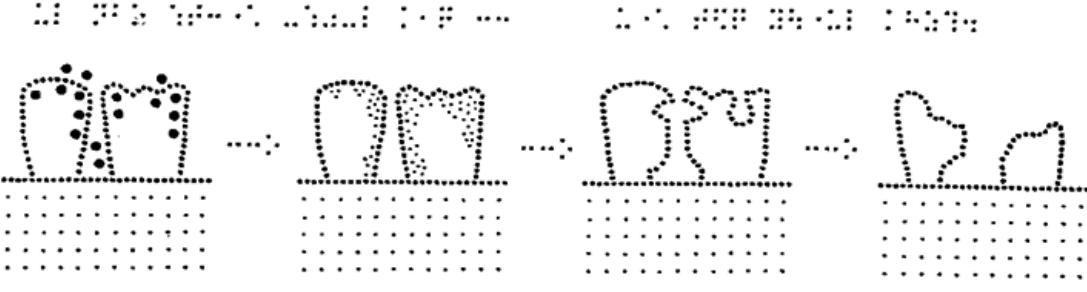
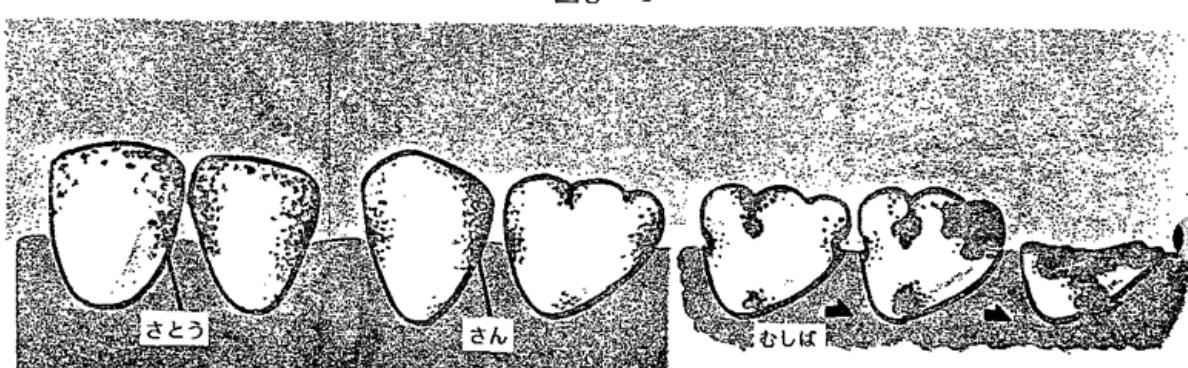
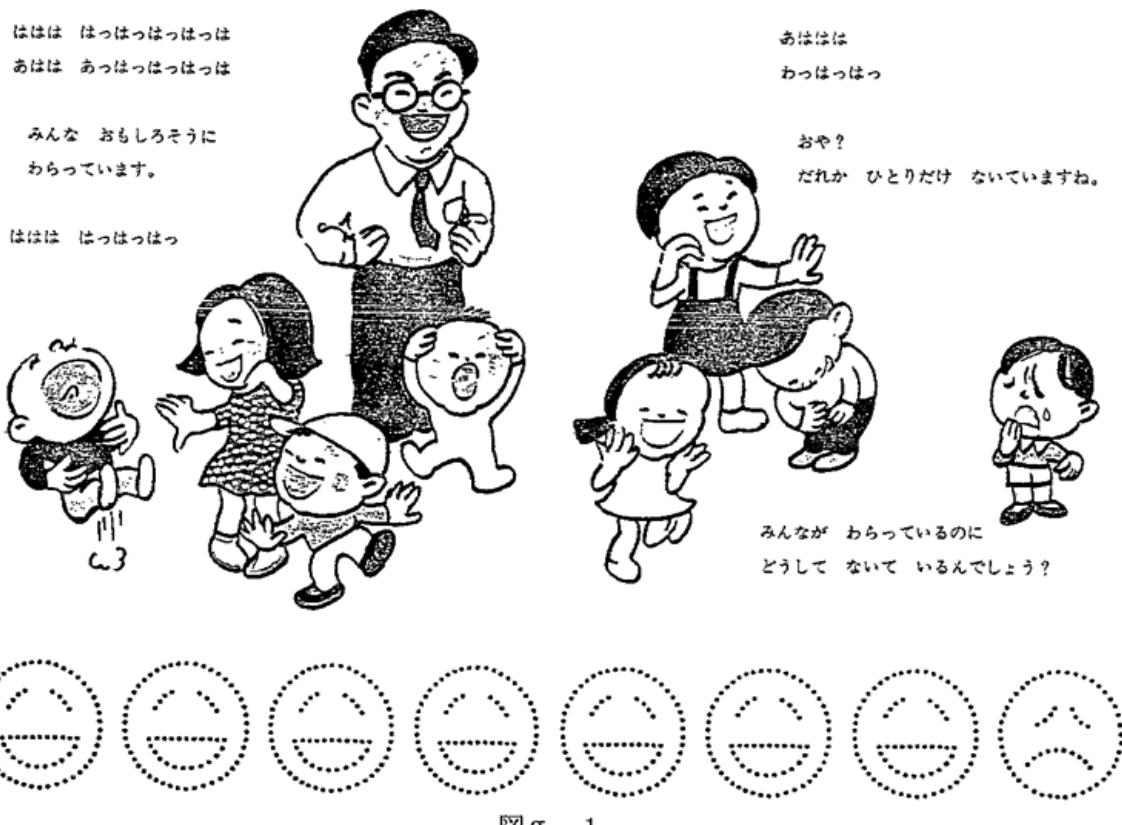
A 6 版 90 ページ 1 部：800 円 日本盲人福祉研究会 1988年1月刊

〒166 東京都杉並区成田東 5-36-15 Tel 03-220-1421

キャンパンスにオジサンは舞う・盲学生憤闘記(大橋由昌著)

B 6 版 220 ページ 1 部：1,500 円 彩流社 1988年4月刊

〒102 東京都千代田区富士見 2-2-2 Tel 03-234-5931



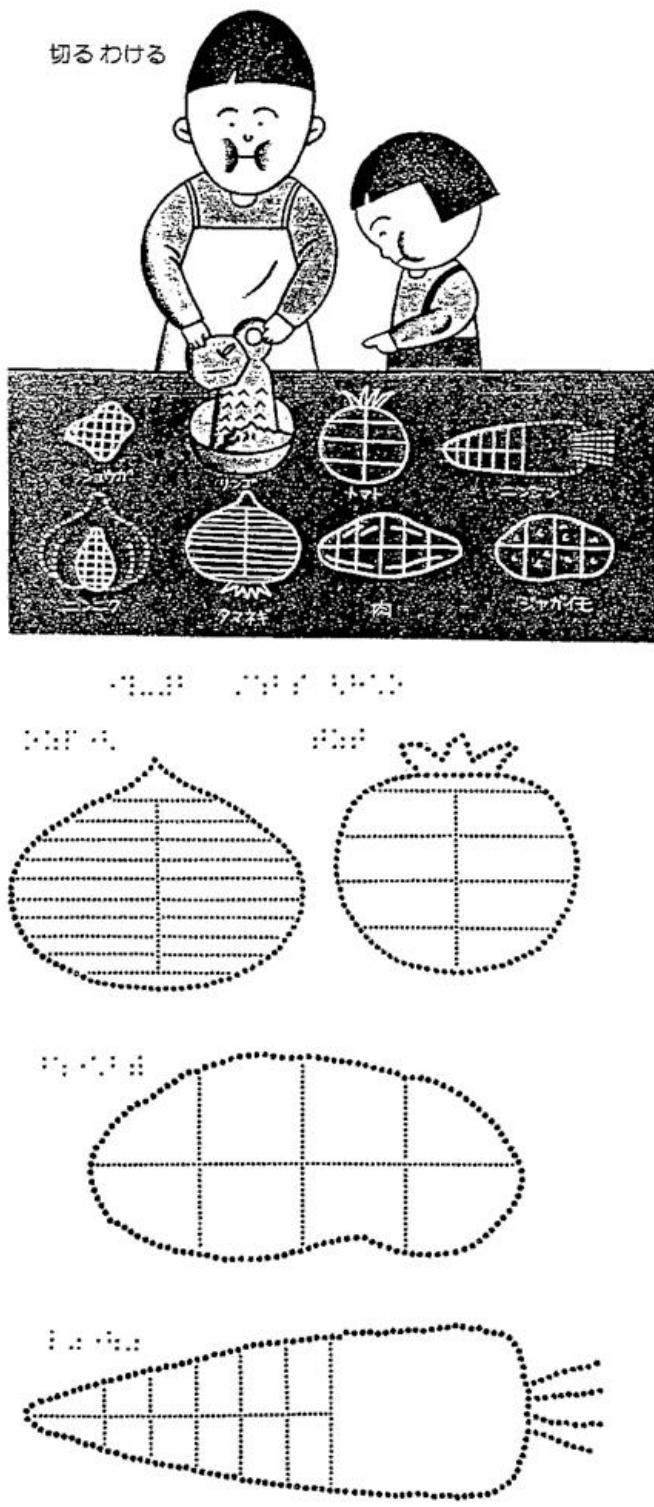


図 g - 3

3. 校正者からも一言

ここで、これらの作品群を初めとする触図の、最初の読者でもある校正者の見解を紹介しよう。

○小原二三夫

私は、小さい頃からほとんど見えなかつたし、物をはっきり見た記憶は全くない。ただ、幸いなことに、平面や空間の図形の概念は持つことができた。

点図を触って見る場合、私には形そのものを辿ることはできるが、それを視覚的なイメージに結びつけることはできない。数学的・論理的な図は別として、絵本に出てくるような具体的な、時々デフォルメされた図になると、実際に触った感じとのギャップが大きく、また、触ったことのない物を図だけから、触覚的にしろイメージすることはほとんど不可能である。つまり、既知の物からの類推はほとんど働かない。

更に、見たことがないというハンディからくる分りにくさに加えて、触図は元の絵に比べて情報量が少なく——例えば、色や背景や陰はとても表現しにくい——立体感やリアルな感じはほとんど伝わってこない。

とはいっても、出来るだけ早い時期に、見える人に説明して貰いながら、また同時に実物との対応をつけながら図を触ってみることによって、触覚的イメージと視覚的イメージとの相互翻訳の技術は、多少なりとも身に付けることができるのではないだろうか。私にとっては願望でしかないのだが——。

○井上真知子

私自身が弱視なので、点字の触読校正という現在の仕事が果して適職なのかどうか未だに大いに疑問である。ただ、点字を読む、ということに関しては、私にとっては墨字よりも常用文字なので、さほど問題はないと思われる。しかし、こと触図となると問題は別なのである。

私は、指で図を見るのは全く仕事の時だけに、日常必要なときは目に頼っている。デスクの上に触図を置き指で触れてみると、それがウサギの絵であると理解できるのは、触れたものを頭の中で組立てて、映像を思い浮ばせてからである。だから、過去に自分が見たことのない絵や図を見ても（無論、それは絵や図の形で、であるが）、それが何であるかほとんど理解できない。も

もちろん、図形やグラフや模式図はその限りではない。それらは、内容をいかに理解できているかにかかる問題である。これらのことと先天盲の人に当てて考えてみた場合どうなるのか、その辺りが私にはやはり分らない。ひとつの絵を触って、きれいだと可愛いだとかいう感覚をどうやって持てるのかといった、極く基本的なことが私には分らないのである。

私が、仕事の中で出来ることは、線や点が鮮明か、中に書かれた文字が読みやすいか、必要以上に細かく表現されすぎて誤解を与えないか、せいぜいそんなところなのである。

◎斎藤早苗

私は、所長の書いた点字絵本の自称一番のファンである。中でも『ちいさなうさこちゃん』は絶品である。フワフワでつぶらな瞳のウサコちゃんが本当に可愛らしく描かれているからである。しかし、ここでこのように“可愛い”とはっきり主張するまでには、いろいろ曲折があったのだ。

初めて『うさこちゃん』を手にしたとき、限られたサイズとピッチの点の連なりで、よくここまで描けるものだと驚いてしまった。私はいつも、点で絵を書くときはなるべく細かい連続線であって欲しいと思っている。点字板作図のように点と点との間隔が大きいと、頭の中に像を結ばせることが難しいからである。そういう点からみても、限られた条件の中でウサコちゃんは表情豊かに描かれ素晴らしい出来だ。しかし、私がこんな風に感心していた頃、他部署の職員が書いた、点字の絵本に対する感想を読んで驚いてしまった。全盲で絵を辿ることは難しく、まして表情を理解することなど皆無だ、というものである。

ウサコちゃんを可愛いと思う私と、表情などは理解できないという声。どこからこのようなギャップが生じたのだろうと考えている内に、私には、かって物を見た経験があり、三次元の物を二次元の世界で表現したらどうなるかが分っていて、仕事で何枚も絵を見ているうちに、指先を通してその記憶が戻ってきただけなのだと気が付いた。

気付いた事柄自体は私にとって喜ばしいことではあったが、それでは先天的に視覚のない子供達にとって点字の絵本は全く意味のないものなのだろう

か、また、私が「可愛い」とか「表情がいい」などといって校正していることにも意味があるのだろうかと考え込んでしまった。

このような、迷いとも疑問ともつかないものを持ちはじめてから半年あまり経った昨年の夏のこと、大阪市立盲学校の藤田先生が、『はははのはなし』と『ちいさなうさこちゃん』を見る子供達と、それをサポートしていらっしゃる先生の声を録音して送って下さったのだ。本当に絵を理解し楽しんでいる声や、先生がおっしゃるから一生懸命見ているのだなと思える声や、全然面白くなさそうな声など、色々だった。

『ははは』にはストーリーはないけれど、日常的に接触のあることなので、分りやすそうだったが、私の好きな『うさこちゃん』を見るのは、なかなか難しそうな様子だった。しかし、このテープを聞かせていただいたお陰で、私の悩みとも疑問ともつかないものに少しだけ光が射しはじめたのである。点字で絵本を書くことは意味のないことではなく、サポートさえ得られれば、個人差はあるにせよ、ある程度理解することはできそうだ。なにしろ、今まで点字の絵本そのものが少なかったのだから断定的なことはいえないが、小さいころから繰返しサポートを受けて絵に触れていれば、将来、点図や地図を理解するための助けになることだけは間違いないさそうだ。

しかし、絵は楽しむものだ、楽しんでほしいと私は思う。一般の絵本にも教育的な側面はあるが、やはり絵を見て面白いと感じることが、色々なものへの興味につながるのだろう。その観点からみると、教育的な意味は見出せても、絶対的に「楽しめるのだ」と主張できないところに、点字絵本に対する寂しさは残ってしまう。

いま私が「ウサコちゃんはフワフワで、つぶらな瞳をしていて、本当に可愛いのヨ」と頑張っても、「本当ネ」と応えてくれる声は僅かかも知れない。でも、色々な驚きや迷いや喜びを真正面から受けとめて、これからも絵本を校正していきたいと思う。

《インフォメーション7 パンフレット》

川崎市福祉センター業務課盲人指導係ではパンフレット「弱視ってなに?」(B5, 10ページ)を作成しました。御希望の方は、〒210 川崎市川崎区日進町5-1 Tel 044-211-3181まで。

おわりに

触図は他の点字出版所でもいろいろ制作されている。東京点字出版所発行の『瞳ちゃんの眼鏡』(河村美千子編)を見ると、まず、当所の点図とは点が違う。くっきりと盛上がっていて見た目にも快い。点が、円錐形や半球形でなく、円筒の角を少し落とした形になっている(木塚、点字科学散歩 昭和56~57年)からだと思われる。点間も標準サイズで10センチに60~61個と正確この上ない。また、いつでもこのような点が打出せるということは技術や機器が安定しているのであろう。利用者に喜ばれる点字情報の供給は、このような次元から考え直さなければならないと反省しきりである。

また、印刷方式は異なるが、小学館の『テルミ』(図h-1)や偕成社の『ザラザラくん、どうしたの?』(図h-2)『ちびまるのぼうけん』(図h-3)などのように、一般の出版社が盲児のための優れた触図図書を発行しており、印刷・製本などに高い技術を見ることができる。また、複製が困難だからと制作をためらっている“触る絵本”も、いつかは手がけなければならないであろうし、研究と実践は日々積み重ねておく必要がある。

出版現場は、組織として機能していくながら、こと触図に関しては感覚的な差や技術的な得手不得手があって、ともすると個人プレーになり勝ちである。しかし、原図から触図へ変換する際のセンスや制作技術の交流・伝承ができれば、組織の力量は格段に向上するであろうし、点字出版全体の前進に役立つのではあるまいか。そのような気持で、実例に即して書かせていただいたが、取止めのない内容になってしまったことをお詫びしたい。様々な面でのご叱正を願ってやまない。

参考文献

- 木塚泰弘 昭和56~57年 点字科学散歩 かけはし 113~126号 神奈川県ライセンターセンター
公共交通機関利用ガイドブック(視覚障害者用)作成マニュアル策定調査委員会編 昭和59年 視覚障害者のための公共交通機関利用ガイドブック作成マニュアル 運輸省

日盲社協点字出版部会点字地図記号研究委員会編 昭和59年 歩行用触地図製作ハンドブック 社会福祉法人日本盲人社会福祉施設協議会
日本点字図書館点字部編 昭和61年 点訳のための触図入門 社会福祉法人日本点字図書館



図 h-1 『テルミ』（小学館）

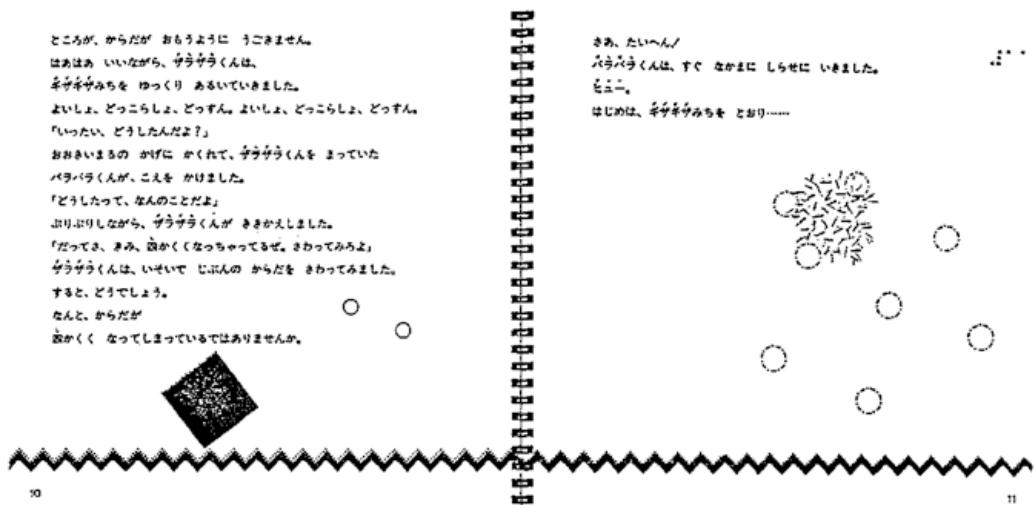


図 h-2 『ザラザラくん、どうしたの』（偕成社）

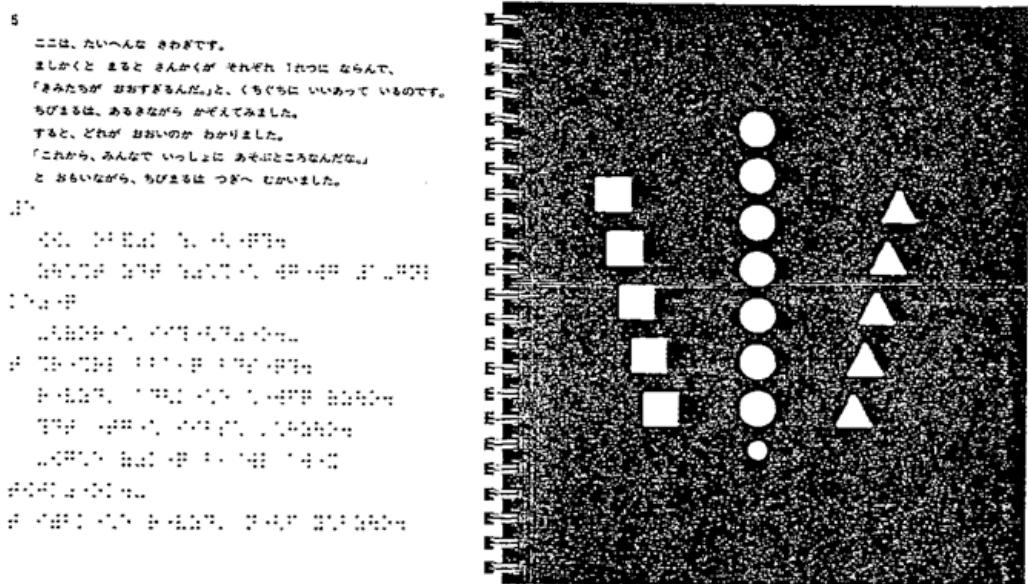


図 h-3 「ちびまるのぼうけん」（偕成社）